

Luncheon Linguistics, 8 May, 2019

2019（令和元）年5月8日

「ペルシア語の対比的話題標識 ke と ham」

発表者：大久保 弥（東京外国語大学大学院博士後期課程）

統語的に似た性質を持つペルシア語の小辞 ke と ham は、その意味論・語用論的な側面についても並行的な振る舞いを見せる。本発表では、これまで議論されてこなかったこれらの小辞を Question Under Discussion の枠組みにおける対比的話題標識(Roberts 2012, Buring 2003, Constant 2014)とする分析を提示する。主張における使用に分析を制限すると、ke と ham は、ある疑問の下位疑問に答える際に、その下位疑問間で対比的関係にある焦点要素を標示するため、対比的話題標識と見なせる。しかし、両者は互いに異なる性質を持ち、その違いの一つは、談話における対比の方向性(Constant 2014, Abderbois 2016)、つまり、談話内の先行関係である。

ke は forward-looking であり、談話参与者により受理された下位疑問のうち、談話で先行する下位疑問に答える際に用いられる。つまり、ke は、ke が生起する発話の主張が答えを与える下位疑問と姉妹関係にあり、まだ答えられていないような下位疑問が談話内にあることを示す。累加標識として認められてきた ham は backward-looking の対比的話題標識であり、ke とは対称的に、既に答えられた下位疑問を姉妹関係に持つ下位疑問に答える際に用いられる。この条件は累加標識が持つ前方照応の条件と同様である。さらに、両者が重なり合った hamke という形式は、疑問の分割における最後の下位疑問に答える際に用いられる。すなわち、hamke を含む主張は、それが下位疑問への答え(=部分的回答)を与えることで、その疑問の上位疑問への答え(=完全回答)を与えることを示す。

ペルシア語の小辞を対比的話題標識として分析することから、対比的話題標識の対比の方向性への敏感さと、焦点小辞を談話構造から分析することの有効性が例証される。これからの課題としては、従属関係を持った節での ke と ham の生起に関する説明と、hamke の意味を ke と ham から構成的に得ることが挙げられる。